

メトロマニラのホームレス問題—路上調査から

講師：特定非営利活動法人社会理論・動態研究所 青木秀男

指導教員：小玉徹

日時：2016年4月8日（金）午後6時30分～9時20分

場所：梅田サテライト6階107教室

議事録担当：M1 絵面功二

1. 本日の講義の目的

メトロマニラのホームレスの現状を俯瞰する。

2. 青木先生のプロフィール

釜ヶ崎の研究からスタート。グローバルの視点で日本の現状を把握したいと、15年ほど前から、インドネシアの社会調査を始める。その後、マニラのスクオッター（公共の場所で実質、居を構えて集住している人々や地域）の調査に加えて、近年増えてきている定住地域を有しない人たち（ホームレス）の現状調査を行う。

3. グロバリゼーションとホームレスの関係(概観)

2000年代に入って、マニラでは、新しい現象が起きている。定住場所を持つことのできないストリートホームレスと呼ばれる領域の人々が増えてきている。公式データはないが、約10万人程度と見積もっている。ちなみに、マニラの人口1,200万人の3割にあたる約400万人近くがスクオッターである。このような現象は、時期やプロセスが異なるがマニラだけでなく、世界各国で見られている。

① ロサンジェルス

70年代終わりから80年にかけてニューホームレスの発生。スッキド・ロー（都会の中の一部）と言われる地域の発生。黒人スラムと異なり、人種、年齢、性別の多様化が見られている。

② 日本

1990年代から見られ始める。

③ ワルシャワ

元来、全体的に豊かではなかったが、新自由主義への移行を機にホームレスが目に見える形で増えている。

④ 発展途上国

少し期をずらして発生。

4. マニラの貧困問題

マニラの貧困問題は、スクオッターの問題であり、ホームレス問題ではない。スクオッターの規模や2～3世代に渡る歴史などからも政権は無視できない状況となっている。マルコス政権の倒れた背景はこのスクオッターの問題が起因していると言われている。間接的データでは、路上生活者は推計10万人（5年前調査）、日本の1万人程度と比較するとその規模の大きさが窺える。スクオッターには生活の不安定さはあるが、定住する家があり、大きなコミュニティを作って、代々、集住していることによる占有権を主張している。一方、ホームレスは非定住で、毎日寝起きする場所を変えるなど、スクオッターとの違いがある。ホームレスの領域の先行研究がなく、ホームレス問題は、社会問題として顕在化されていない一つ証左である。

5. ホームレスの形成

① スクオッターから街頭へ

ジェントリフィケーションによる強制撤去。再定住地の補償がないケースもある。

② 再居住地から街頭へ

都市から離れた地域が再定住地先となると、就労機会が喪失することが起こる。

③ 地方出身者

過剰都市化論と言われる、農村地域から都市部へ大量の人口が流入することで労働力の供給関係が崩れ、ホームレスが発生する。しかし、今は、2-3世代へと内部継承でホームレスが増加する傾向が見られている。

⑤ 一般困窮者

雇用の非正規化、労働のインフォーマル化、飢餓賃金などが要因。

⑥ シェルターから街頭へ

実数として数は少ない。なぜならば、シェルター自体近年作られた。これは、既述のホームレスが社会問題となっていないから。

⑦ ストリートチュルドレン

路上での世代間再生産。アメリカの場合、子供は守られているが、発展途上国は異なる。家族で路上生活するスタイルが多い。路上から脱出することができない。

6. ホームレスの構成例（収容所での調査）

ホセ・ファベラ・センター（収容所）、2011年7月13日の実地調査によると、健康者56人、身体障害者35人、精神障害治癒者36人、先住民（最底辺の地位に置かれている）15人、親がいるこども16人、親がいないこども80人。数的には、単身男性が最大、次に、女性とこどもの順。

7. ホームレスの平均像（一例）

・2013年時点29人を調査した際の一例（42歳、男性）。

- ・学校卒業後、生息地で下層の仕事に就労。
- ・マニラへ仕事を求めて出ると同時に、10年間スクオッター生活。下層の仕事に就労。
- ・仕事を失い街頭生活へ。その前後、結婚。
- ・路上生活を続けながら子どもをもうけている（ファミリー・ホームレスの形成）。
- ・ホームレスになる前後で仕事内容は変わっていない。路上での商売などを遍歴。

8. ホームレスの空間分布

- ① 金銭、食料が得られやすい場所
- ② 首都圏の東、北、南部

スクオッターの人口飽和の自治体と増加中のそれに分かれる。スクオッターの郊外化とホームレスの都心化の傾向が見られる。

9. ホームレスの「空間と政治」（途上国）

- ① 公共空間は家の延長として位置付けられ、公有と私有の融合が特徴。つまり、占有が社会的なコンセンサスとなっている。これを「擬似公共空間」と呼ぶ研究者がいる。
- ② グロバリゼーションの流れの中での、ジェントリフィケーション、ビューティフィケーションなど西洋都市への収斂が見られる。
- ③ スクオッター・ヴェンダー・ホームレス間で、占有意識、社会的容認度合いと抵抗資源に一定の差が存在する。

主な質疑応答

Q. ホームレスの実態調査は目視調査が主だが、マニラでのホームレスの調査は。

A. 貧困地域ごとに援護活動に引っかけた人がデータの基本。ホームレスを特定対象としたデータはない。

Q. ホームレスの2世、3世といった継承はカトリック教徒の国特有の墮胎などができない背景も強いのでは。

A. 宗教的背景もあるが、「子供が唯一の宝」といった考えが浸透している国民性でもある。

Q. ホームレスの生活実態と仕事（社会的な役割）について。

A. 単純なもの売りの仕事から変わってきている。主として、ミドルクラスに対するサービスをする仕事が増えている。新しい仕事としては、ビルの管理人、警備員、駐車場の監視員など。民衆の生活水準が少しずつ上がってきているので、生活スタイルなども変わ

ってきている。公務員でもスクオッターにいる。住民票などもある。また、フィリピンの生活保護政策は特にこどもに対して存在する。

Q. マルコス政権崩壊後の状況変化は。

A. 大きく変わった。アキノ政権から民主化路線へ転換し、スクオッター対策の諮問委員会を作り、スクオッター出身のメンバーを入れているが、実際の効果に対しては疑問視する意見もある。

Q. 外国資本の進出が必要ではないか。

A. 日本企業の例では、マニラに1000社を超える企業が進出。まだまだスケールが小さい。最近では韓国企業が増えている。一方、国策で出稼ぎ推奨を行っている。数としては、130万人で、主に、中東、香港など。日本へは約1割。スクオッターの中でも外国へ行く人が増えているが、ミドルクラスに限定されている。

Q. グロバリゼーションとホームレス発生の相関性

A. 規制緩和、公共財の民営化による経済進行、人件費カットによる非正規化、ジェントリフィケーション、都市部での富裕層だけの住居空間（排除空間の存在）拡大などによる影響があげられる。また、先住民においても、貨幣経済の進展による影響が見られる。

10. まとめ

社会や経済環境の大きな変化の中で、これらの動きに対応できず、一番の”しわ寄せ”を受けるのが、良し悪しの議論を置いても、経済的、社会的弱者と呼ばれる人々かも知れない。

一方で、経済発展と同時に期待できる BOP 層の底上げ、その恩恵の享受達成までの、一時的な副作用という見方もあろう。ただ、今回の首都マニラのケースでは、ホームレスの規模と世代継承など、複雑かつ、深刻さが入り混じってしまったと思慮され、国自体の経済力を含む国力の底上げを通じた社会問題の解決プロセスが、今回のような課題の解決に結びつくか、否かは議論が分かれよう。

グローバルで見られる、富の一極集中は、今次のタックスヘブンを通じた富裕層の節税行動（パナマ文書）のリークにより、大きな社会問題となる可能性もあると同時に、社会構造のゆがみに対する注目がますます高まってくるであろう。

まずは、現地を知ることで新たな問題意識の萌芽に結びつけていきたい。

以上